ファーストレディ

上

遠藤周作

新潮社

ファーストレディ

上

遠藤周作

新潮社

ファーストレディ 上

一九八八年八月一五日 印刷
一九八八年八月二〇日 発行

著者 遠藤周作（えんどうしゅうさく）

発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社新潮社
〒一六二 東京都新宿区矢来町七一 振替東京四―八〇八
業務部〇三(二六六)五一一一・編集部〇三(二六六)五四一一

定価 一一〇〇円

印刷所 二光印刷株式会社
製本所 加藤製本株式会社

© Shūsaku Endō 1988, Printed in Japan
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-303518-8 C0093

ファーストレディ 上 ■目次

第一部

火 7
天皇 27
恋 66
修業 104
シラノ 123

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第二部

赤い絨緞 163
選挙 191
女 210
ライバル 230

装幀・辰巳四郎

ファーストレディ 上

第一部

火

この小説の読者のなかには、むかし大当りをとった『君の名は』という映画をごらんになった方も多いだろう。

故菊田一夫の原作で、これも他界した佐田啓二と、岸恵子とが主演したこの作品は満天下の女性ファンの心をつかんだものだ。

特に――

岸恵子の扮する女主人公、真知子のショールのまきかたは「真知子まき」とさえ呼ばれて、当時の流行になったほどである。

空襲下の東京の数寄屋橋でふと出会った青年と娘とは、もし戦火に生き残ったならば、一年後のおなじ日、おなじ時刻に、この橋で待とうと約束して別れる。

この場面はそれをみている者たちには、せつないほどジンとくる場面だった。なぜなら当時の観客たちも、すさまじい空襲のなかで明日もわからぬ命をなんとか生きのびた人たちだったからである。

別所百合子も親友の滝愛子と日比谷の映画館に出かけていった。
見終って観客の群れにまじって、午後の雨で少し湿った歩道に出た時、愛子がふうっと溜息をついた。
「よかったわねえ。久しぶりで映画みたけれど岸恵子って何て、奇麗なんでしょ」
百合子は少しおセンチな物語だとは思っていたが実は別の意味で感動していたので呟いた。
「わたしたちも……あれに似た経験あったわね」
「ああ、そうか。あの夕暮でしょ、工場の帰りの……」
「ええ」
有楽町の駅にむかって歩きながら彼女はいつものことながら心のなかで反芻した、あの夕暮の林檎のような雪の匂い、高射砲のはげしい音、地ひびき。そして彼女を身をもって守るため抱いてくれた学生の学生服の匂い。
あれは戦争が終る七カ月前の、空襲が激化しはじめた頃で、百合子も愛子も聖花女学院の三年生だった。
もうこの頃になると三年生以上は授業よりも川崎の航空機工場に勤労動員の生徒として働かされることのほうが多かった。
朝九時から夕方の四時半までモンペを着用して、日の丸の鉢まきをしめて彼女たちは工員の作業着の洗濯やつくろいをしたり、また簡単な機械を使って部品作りもさせられた。
午後の三時になると湯のような雑炊が配給される。そのほかは昼休みとあと一回、二十分の休憩があるだけだったが、その休み時間が百合子や愛子たちにとってはまるで砂漠のなかでやっと水を飲むことを許されたような倖せな時だったのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「知ってる？　あなたたち」
と級友の一人が日なたぼっこをしている数人の仲間に教えた。
「米国のほうも随分と物がなくて困っているらしいわよ。父が話していたけど……墜落したB29の翼をしらべたらね、つぎはぎだらけのもので、スフ入り綿布に銀色の塗料を使ってあったんですって。飛行士の服も囚人の着るような木綿の作業服で色があせてたというわよ」
その女子学生の父親が放送局に勤めていることは皆、知っていた。
「でも食べものはたくさん、米国にはあるのかしら」
と誰かが食べざかりの級友たちの代りに言った。
「欲しがりません、勝つまではというけれど死ぬ前に一度でいいから……大きなおはぎやアイスクリームをお腹いっぱい食べたいなァ……」
憲兵が耳にしたら怒鳴られそうなこの詠嘆的な言葉も本当に皆の本音だったからドッと笑い声が起った。
「あのね、これも秘密なんだけれど」
とさっきの娘が声をひそめて、
「資生堂ではね、政府の命令で、今、高級香水をそっと作っているのよ」
「香水？」
皆はびっくりしたように彼女を見つめた。香水、そんなものが今の日本でまだ作られているのか。信じられない話だった。
「そうよ」
「誰が使うの」

「軍のえらい人たちの奥さまじゃない？」
「じゃ、わたしたちには配給はないの」
「もちろん」
すると皆はまた声をだして笑った。その笑いのなかにはにがい諦めがふくまれていた。誰もが心のなかで、戦争はいつ終るのだろうかと考えていた。百合子も愛子もおなじだった。
その日の帰り、百合子は愛子と川崎駅まで歩きながら、
「こんなこと言っちゃ叱られるけれども、日本はあちこちで負けているらしいわよ」
と教えた。
「やはり本当？」
「本当らしいわ。戦争はもう一、二年だろうと言う人もいるんですって」
「神風は？　どうなったの」
と愛子はひきつったような顔をして、
「でなければ、空襲や戦地で死んだ人たちが浮ばれないわ。無駄死にだもの」
空は鈍色で、その鈍色の空のなかにかすかに爆音が聞える。
「今夜も空襲かしら」
ミッドウェイで日本海軍は大勝利をおさめた筈なのに、昨年の十一月には敵機の編隊が武蔵野町の中島飛行機の工場を爆撃した。
年があけると連日のようにB29が飛来してくる。小規模ながら神田がやられ、日本橋附近が破壊され、城東区にも被害があった。今まで遠くに思えた戦場が突然、この東京に移ったことを百合子も愛子も肌で感じはじめている毎日になった。

一月二十七日、お昼休みが終って百合子たちがふたたび作業にとりかかっている時、地を這うようなサイレンの音が工場に鳴りひびいた。

「空襲警報、発令」

今までとはちがって午後の二時ごろにこんな空襲を受けるのははじめてだった。いよいよ本格的な爆撃が開始されたのだと百合子は予感して、

「逃げよう」

そばで部品の掃除をしていた愛子たちをうながした。工場のなかにある防空壕はそれぞれの班で割あてがきまっていた。

三十分ほど、莚と土の臭いのする防空壕のなかで息をこらしたが、爆音も聞えず高射砲の響きも伝わらぬうちに警戒警報に変った。

「何でもなかったわ」

皆はホッとした表情で防空壕から一人一人這い出てくると、おたがいにモンペについた泥をはたきあった。

だがまもなく、東京の中心部でかなりの被害が出たというニュースが入ってきた。七十数機の編隊が銀座や有楽町に集中攻撃をかけたというのである。

ラジオは必要最少限度のニュースしか流してくれないので、どこがどうなっているのか、皆目わからない。ただ省線の中央線では電車も停って、火災が終るのを待っているらしいということだけが拡声器で知らされた。爆撃は銀座附近だけというので、皆は口にこそ出して言わね、自分たちの家が助かったことにホッとしていた。

外に小さな雪が時々舞う、底冷えのする午後である。
四時半にサイレンがいつものように鳴り、百合子も愛子も急いで帰り支度をした。
「あたしたち、やがて死ぬのかしら」
と駅に行く灰色の路で突然、愛子が泣きそうにたずねた。
「馬鹿なこと言わないで」
と百合子は本気で怒った顔をした。
「わたし、どんなことをしても、生きてやるわ」
駅につくともうあたりはうす暗かった。電車は一時間ほど前から動きだしたそうだが、線路が修理中なので間引き運転になっていたから、ながい間、待たされて発車した車輛は朝のラッシュとおなじくらい満員で汗と疲労の臭気がこもっていた。
しばらく走ってはスピードが落ち、しばらく停車してはまた動くという状態が何度かくりかえされた後、やがてその電車がやっと有楽町駅ちかくまで来ると、
「おお」
というどよめきがいっせいに車内に起った。
線路にそったビルの窓からまだ火が吹き出ていたのである。それも一つ、二つではない。空襲のすさまじさが百合子にも愛子にも今、はっきりとわかって、二人とも思わず息を呑んだ。
闇のなかでビルの窓から吹き出す火は蛇の舌のように動いている。
「畜生」
突然、誰かが怒鳴った。だが車内の人たちはまるでそれが聞えぬようにただ黙って炎を凝視していた。

また電車が停ったまま動かなくなった。胸から突きあげてくる不安を抑えるため、百合子と愛子とはおたがいの手を握りあっていた。

やがて発車して二分もたたぬうちに有楽町駅のホームについたが、ドアが開くとメガフォンを口にあてた駅員が、

「全員、おりてください。また空襲です」

と叫ぶ声が聞えた。

女の悲鳴がした。客たちは出口に向けて殺到した。ホームを男たちが我先にと逃げていく。百合子と愛子とはそれぞれそんな男たちに突きとばされて、ホームに転び、あとのほうから階段を駆けおりた。

その時、まるで鉄槌で叩くように地ひびきがした。爆弾が落ちたのか、近くの高射砲の音なのか、わからない。

駅から出るに出られず構内を二人はうろうろとしていると、

「君たち、こっち」

と改札口のちかくで呼ぶ声がした。

二人の大学生が自分たちのあとをついてこいと合図している。百合子は愛子をみて、

「行こう」

とそのあとを駆けた。相手は男だが大学生だから信用できるという気がしたのだ。

学生たちは駅の裏側をぬけて防空壕のひとつに飛びこんだ。それは歩道のところどころにある蛸壺のような小さな防空壕だったが無いよりはまだ、ましだった。

地ひびきがまたした。四人は身をすりあわせるようにして小さな穴のなかに身を寄せあった。

「君、防空頭巾は」
と学生の一人が愛子にたずねた。
「すみません。駆けてくる途中、落したんです」
と愛子が肩をすぼめて言うと、
「これを」
と彼は自分の学帽をとって彼女にわたした。
「でも」
と愛子がためらうと、
「いいんだ、ぼくの頭は石頭だから」
と彼は白い歯をみせて笑った。
しばらく息をこらしていると、もう一人の学生が、
「食わんか」
新聞紙の包みから何かを取り出して渡してくれた。ふかし芋だった。
「今日、俺たちの送別会があったさかいな。その土産でもろうたんやで」
「送別会って」
「二人とも入営が決ったさかい」
「いよいよ出陣で……」
「まあそや、二人とも別々の部隊やけど」
闇のなかでよく相手が見えないが、関西弁を使う学生のほうは満月のようにまん丸の顔をして、太ぶちの眼鏡をかけていたが、愛子に学帽を貸しあたえたほうは、細長いシェパード面で、勉強

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com